

## 藤田家と幽谷の幼少時

杉崎 仁

失礼致します。お手元に差し上げました「藤田家の系譜について」という抜き刷りは、昭和四十九年に水戸史学会から出されました「藤田幽谷の研究」と言う書物が出されました。かれこれ三十年近くなりまして、お手元にお持ちの方どれくらいいらっしやいますでしょうか。本日の「藤田家と幽谷の幼少時代」という内容と、ほぼ一致するものですから抜き刷りを作りまして差し上げました。細かい系図等の考証部分はなにかの折に読んで頂きたいと思います。それよりもっと大切な問題、いわば家の風、家風と申しますか、その点をお話申し上げた方が時宜に叶っているのではないかと、私も感ずる所が多々あるものですから、その点を申しあげたいと思います。と申しますのは先日長崎で、悲劇と言うよりも、とんでもない地獄絵が出現致しました。次男の高校生を釣りと言つて誘つて睡眠薬を飲まして親と愛人が殺すと言う、日本の歴史で果たしてこんなことがあつたのか。調べて行く内に七年前に亡くなつた夫も殺されていた、というのが真相のようですが、このまま行けば日本そのものが滅びる、本来そういう国で無かつたはずであります。先日、七月三十日に東チモールが独立か、あるいはインドネシアの自治州に留まるのか、と言うことで投票が行われました。その結果、投票率は九十九パーセントを超したという。まさかと私は思いました。というのは私も生徒達を連れまして、インドネシアに行ったことが二度ございます。東チモールは行っておりませんが、インドネシアという国は、五百くらいの民族と言うか、種族と言うか、言語と申しますか、色とりどりの国であります。テレビで見ても御覧の通りでありまして、非常に色の黒い褐色味を帯びた、或いは我々に非常に良く似た人たちもあり、交流も活発でありました。まさに海の十字路ということが言われるくらい、アジアの多島海といわれる島の多い国であります。そういう国で、あの国連の下で投票しまして独立賛成派が七十パーセントを超えたと言うことであります。しかしその前から斧を担いだり山刀を持って殺戮としていたのであります。それが現実でありまして、われわれ日本はいまだかつてそのようなことは有りませんでした。確かにこの東国でも平安時代に平将門が反乱を起こしております。その平将門の反乱を平定しましたのが藤原秀郷であります。この藤原秀郷の子孫であるという自負心を持っていた若き藤田幽谷が十二歳の時、蒲生君平が水戸に参りました。下野の蒲生君平は後に天皇の御陵、お墓が荒廃しているのを嘆きまして自ら調査をされます。現在のような交通事

情の良い時ではありません。この蒲生君平の亡くなられて後、藤田幽谷先生は、碑文を書かれています。それは後に幽谷全集でお読みいただければと思いますが、その十二歳の幽谷先生の家に蒲生君は泊まられました。そして時局を嘆いたのでありますが、これが幽谷先生の胸奥に強く焼きつけられておりました。同じように十八歳の頃になりました高山彦九郎、この方は京都では加茂川の橋の畔で内裏を拝して、時局を憂いて天皇の御身安かれとお祈りされ、遂に九州で自刃されます、この方とも親交をもたれました。私が疑問に思いますのは、十二歳の時に、どうして蒲生君平が幽谷先生のお宅に泊まられたか。まだ解し得ないのであります。おそらく幽谷先生のお父さん、あとで申しますが幽谷先生の家は古着商を営んでいましたが学問を好みまして、学問形成の上でお父さんお兄さんお母さん、お母さんの亡くなった後では継母の方が幽谷先生の学問が成長するように暖かく育てたのであります。お父さんも古着商でありますけれども学問に志していました。世の中どのようにしたら良いかということでも色々な著述も読み、書き残しておりますが、そのような家庭環境で、時世に秀でた人たちとの交流が出来たのであります。当時近海にも外国船が出没していました。そういう状況の時です。この藤田家の先祖は今の那珂町の森林公園の近くに生活していました。当時、農村は非常に苦しい生活をしていました。そこで住まいを水戸に移しまして古着商を営むことになりました。水戸藩でも長く停滞の時期が続きました。その中から義公の精神が復活してくるわけであります。父祖の道統が伝えられ復活してくるのです。おそらく東チモールはこれからも血塗られた時代が続くであろう。オランダの支配、ポルトガルの支配が重複しています。いまキルギスで日本人が人質になっていますが、あそこも人為的に国境を線引きした地域であります。ですからわれわれ都道府県市町村を考えましても自然の地形の中で古代以来行政の形が作られたものですが、そうじゃない訳です。ソヴィエト政府の支配を示すための線引きでありました。ですからあのあたりのカザフスタンでも一つの山を国境とするのではない。中近東の国境線はチャーチルが国境線を引く時に彼の手が震えたから所々へこんでいると言われています。コソボの問題ではバルカン半島の戦争は終わりを告げたというけれどもいつ終わるか判らないのが現状でありましょう。セルビア、アルバニアと言いましても、同じスラブ系です。その中で宗教的な血塗られた対立がおこっている訳です。日本で宗教問題を考えますと、我々の宗教的な精神生活は古墳時代に形作られたと言われています。そして農業が発達すると共に新嘗祭にしまして一つのお祭りが形作られて来た。そしてその中で共同体が形成されて来ているのであります。歴史が全然違います。例えばトルコがあれだけの大地震で苦しんでおります。トルコは日露

戦争で日本が勝ちまして非常に喜びました。トルコだけでありませんで、エジプトでもインドでも独立運動を始めた方々はそれに刺激を受けた訳であります。ですからトルコでも乃木とか東郷とかいう名前を子供に付けました。そしてケマル・アタチュルク（パシヤ）などが独立運動に挺身したのであります。ですからトルコは非常に親日的であります。地震の時小淵首相は百万ドルの援助していますが日本円にしてたかだか一億円あまりです。おどかされて北朝鮮に食料援助するのは何億円でしょう。どうもおかしいと思います。日本本来の姿が失われているのではないかと思います。トルコと言う国はいま政治的には大きな影響力は有りません。しかしそういう所にこそ我々は同じ地震国としてあれだけ沢山死傷者を出しているのに援助をするのにも小刻みなんですね。今度二百万ドル追加しますね。なんでそんなちやちな事をするのですか。憤りに耐えません。日本の歴史はそんな歴史ではなかったはずです。例えて申しますと家風、国で言えば国柄、このことが藤田家を考える上で重要な事です。その為には日本の国の国柄を知らなければ、なぜ義公の精神を幽谷先生が復興されたのか、これが解らないのではないか。そちらの話を致します。

皇后陛下の御歌集「瀬音」の中に、ソビエトが崩壊致しまして幾つかの国が独立します。そういう事にも思いを寄せられたお歌がございます。このような事にも天皇陛下とお話をなされておられます。陛下の歌集にもございますけれども、

皇后陛下平成二年の御歌には、

「地図」という御題で

新しき国興りけり地図帳にその新しき国名記す

「ソビエト、東欧に政変はげしき頃」という詞書がございます。変動の激しい世界の情勢に深く思いをはせられて、いつも地図帳はお手元におかれています。拝察されますが、みなさん御年配の方も沢山いらっしゃいますが、我々ともすると五十年が過ぎたとかなんか言って済ましてしまいます。ソ連に沢山の同胞が不当にも抑留されて収容所で強制労働に狩出されて亡くなりました。ソ連側の記録が今年になって公開されました。悲惨な極みでありまして、あのような不当な事がそのまま放置されているのか、日本の戦争責任ばかりを日本人が叫んでいます。あのシベリアに抑留された人達に思いを寄せている日本人は少ないのではないか、私よりもお年をめされた方は思い起こす事がお有りだろうと存じます。その抑留された人達につきまして、

皇后陛下が

「長き抑留生活にふれし歌集を読みて」と詞書がございます、

「早蕨」という題のお歌、

ラーゲルに帰国のしらせ待つ春の早蕨は羊歯になりて過ぎしを

私が以前勤めていました学校で事務長されていた方が、シベリアに抑留された経験がありました。極度の下痢、赤痢状態だったと言います。どうしたかと言うと自分でたき火の炭の粉を飲んで治したと言われました。何時帰れるかわからない。興安丸などで次々と帰って来られましたけれども、お子さまを待つ母親の歌などもあります。帰国は何時なのか、待っていたけれども、さわらびは何時の間にか成長し過ぎてシダになってしまった。そういう思いを歌に詠われております。これが昭和五十三年です。そのほか沖繩が永い間アメリカの軍政の下に置かれました。佐藤栄作首相の努力もありまして、沖繩が復帰したのでありますが、その昭和四十七年皇后陛下の御歌に、

五月十五日沖繩復帰す

黒潮の低きとよみに新世の島なりと告ぐ霧笛鳴りしと

黒潮に洗われる沖繩が、新しい時代を迎えた、それを告げる為の霧笛が鳴っている。

ともすれば自分の生活しか考えておらぬ国民の中で、このような過去の歴史を思い現在の人達を思い、八月になりますと戦没者の慰霊が行われます。戦時下に観音崎を航行中の船が攻撃を受けて沈められた事件がありました。その慰霊の式典が行われましたのが、昭和四十六年でありました。その時に観音崎戦没船員の碑の除幕式が、激しい雨の中に執り行われたのでありますが、その時のお歌、

かく濡れて遺族らと祈る更にさらにひたぬれて君ら逝き給ひしか

激しい雨の中で観音崎で戦没した英霊の遺族と共に碑の除幕式が行われた、その時のお気持ちをお読みになった御歌です。このように戦争で亡くなった人達を思われてのお歌です。また湾岸危機の時には、原油が海に流れてしまう、その油で動けなくなった鶴に対する、お優しいお気持ちなどを詠まれた御歌が非常に多いのであります。

植樹祭の御歌には

父祖の地と君がのらしし京の地にしだれ桜の幼木を植う

父祖の地と陛下がおっしゃられた、その京の地に、これからの日本を象徴するように若い枝垂れ桜をお植えになられる。このように日本の歴史と将来をお思いになられる御歌は非常に多いのであります。

最後に、歴史を考える上で大切なことをお話し致します。明恵上人という鎌倉時代の坊さんがおられます。承久の変の時、北条泰時などが幕府の軍勢を率いて後鳥羽上皇の討幕を阻止いたしました。その時幕府の軍勢が、京都を制圧致しまし

た。京都の西北、梅尾に高山寺という寺があります。その僧が明恵上人です。この方の遺訓に、

「人はあるべきやうわという七文字を持つべきなり」とあります。

明恵上人は「あるべきやうわ」と言う事をよく言われた。僧は僧のあるべきやう、俗は俗の有るべきやうを保つべきなり、帝王は帝王のあるべきやう、臣下は臣下のあるべきやう保つべきなり。このあるべきやうに背くが故に一切が悪くなるのです。自分は亡くなった後に助かるうと思うのではない。この現在生きている世に自分はどうかあるべきか、自分がなすべき事がある、其れを求めねばならない。僧は僧としての世俗では世俗として為すべき事が有る。私は高校の教師でありますが教師として為さねばならないことがあります。母親は母親としての為すべき事が有ります。商人は商人としてする事が有ります。職人は職人として、社長は社長としての有り様があります。これに背くから一切世の中が悪くなる。日本の歴史に本来在るべきものが無くなっている。上に立つ人は慈愛を持って、母親は母親として子を慈しむ、父親は父親として優しさと共に厳しくわが子を育てる。それぞれ在るべきあり方が在るわけであります。日本の教えであれば自利利他であります。当然企業家は富みを蓄積しなければなりません。しかしそれだけでは無い。自ら利益をあげると共に他に対しての思いも考えなければならぬ。これが日本の経済なのであります。ですから明恵上人が幕府の軍勢が京都を制圧した時に、官軍の将兵の家族が逃れてやって参りました。それら困った人達を助けます。全体主義の国家ですと、一族は全て処刑されます。ロシア革命、フランス革命を見ればわかります。北朝鮮にしても同じです。悲惨きわまりないわけです。日本の場合はそうではありませんでした。橘逸勢は、皇位をめぐる争いに加担したということで、伊豆に流される。子供も一緒でありましたが、遠江で橘逸勢は亡くなります。逸勢は空海と共に三筆として有名であります。幼少の逸勢の子は可哀想だということで天皇の命令でふるさとに戻されます。それが日本の本来の姿であります。ヨーロッパではそうでは無い。その事は十分に考えなければ日本の歴史の本質は判らないのです。水戸藩で斉昭公の時、『明倫歌集』の編纂が始まりました。普通の歌集ですと、春夏秋冬、今昔と言うように別けるのでありますが、これの部類分けは、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・神祇・国体・文・武に分かれています。人間として如何にあるべきか、として部類分けしています。その中に幾つかのものを挙げてみたいと思います。

後醍醐天皇のお気持ちと言うもの、それが現在の皇室にも受け継がれています。

後醍醐天皇は自分の権力確立の為に討幕の計画を建てたと言う人がいますが、そうではありません。なんとか本来の姿に戻そうとされた。

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心のをさめがたきを

人々の気持ちと言うものはなかなか難しい、現在を見ればわかりますね。何時の時代でも同じであります。自分の利害を追求する事のみ汲々としているのであります。しかし何とかして本来の日本の姿にもどつて、人々が皆安らぐように治めたいと思うけれども、なんと治め難い事であろうか。

哀れとはなれもみるらん我が民を思ふ心は今も変はらず

隠岐島に流された時に詠われたものです。隠岐島は御存じのように、曇りや雨のことが多くて島根県から見ると一年中でも極々少ないのです。荒れる天候の中で小舟で着岸することは難しい島でした。対岸の島根県の松江も非常に湿度が高い、小泉八雲は丈夫でありませんでしたので身体の不調を来しました。絶海の孤島の、あの隠岐島に流されたその気持ちを知って人々は、哀れと嘆くであろう、しかし自分が国民を思う気持ちは、今も少しも変わらない。

皇室の伝統ということが今の歴史で忘れ去られているのでは無いか。

後嵯峨天皇の御製に次のようなものがあります。

なかなか人によりものを思ふかな世を思ふ身のこころづくしは

自分は天皇の身として人以上に国民の事を責任を重くしてこの世の中が安かれと思わなければならぬ。御歴代天皇の御製を見ますと皆このような御製であります。しかしそれが我々に紹介されていないのであります。後鳥羽上皇の御製、討幕の兵をあげられましたのが承久の変であります、それは本来の日本の道筋に返す為でありまして、その時のお気持ちを詠まれた御製が増鏡にも新古今集にも出ています。

奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせん

北条氏は、陰謀に次ぐ陰謀をくり返した家柄です。他の有力御家人を陰謀を企んで打倒し、更には、北条政子は、二代將軍頼家、三代將軍実朝は我子であります、おそらくわが子が北条氏の権勢を確立する為に暗殺される事を承知したとしか考えられません。と申しますのは、子供が亡き後、尼將軍と言われました。実際に北条政子が政治を動かしたわけであり、ですから承久の変の時にも、幕府に朝廷の軍勢と戦うことに動揺がありました時に北条政子が、御家人に演説して、その動揺を抑えて統率し、幕府の軍勢を上京させたのであります。

以後も北條氏は陰謀に次ぐ陰謀で有力な御家人を次々に葬って参ります。そのようなかで、

後鳥羽天皇が「奥山のおどろが下」の御製をお詠みになって、どのような厳しい状況の下でもそれを踏み分けて行ってこそ、道があるのだ、という事を人に知らせる

のだ。こういう御製を遺されているのであります。此の他にも、国を思い、民を思う御歌が非常に多いのであります。

次に掲げますのは、明治天皇が五箇条の御誓文を御出しになりました時に、国民に対して出されたものであります。

#### 宸翰二曰ク

朕幼弱を以て猝に大統を紹き、爾來何を以て萬國に対立し、列祖に事へ奉らむやと、朝夕恐懼に堪ざるなり。竊に考るに、中葉朝政衰てより、武家權を専らにし、表は朝廷を推尊して、実は敬して是を遠け、億兆の父母として、絶て赤子の情を知ること能ざるやう計りなし、遂に億兆の君たるも、唯名のみに成り果、其か為に、今日朝廷の尊重は、古へに倍せしか如くにて、朝威は倍衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し。かかる形勢にて、何を以て天下に君臨せんや。今般朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれは、今日の事、朕、自身骨を勞し心志を苦め、艱難の先に立、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て天職を奉して、億兆の君たる所に背かざるへし。往昔、列祖萬機を親らし、不臣のものあれば、自ら將としてこれを征し玉ひ、朝廷の政、總て簡易にして、如此尊重ならざるゆへ、君臣相親しみて上下相愛し、徳澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり。然るに近来、宇内大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨我邦のみ世界の形勢にうとく、舊習を固守し、一新の效をはからず。朕徒に九重中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るゝときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る。故に朕こゝに、百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を継述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置くことを欲す。汝億兆、旧來の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事となし、神州の危急をしらす、朕一たひ足を舉れば非常に驚き、種々の疑惑を生じ、萬口紛紜として、朕か志をなさらしむる時は、是朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從て列祖の天下を失はしむる也。汝億兆、能々朕か志を體認し、相率て私見を去り、公議を採り、朕か業を助て、神州を保全し、列聖の神靈を慰し奉らしめは、生前の幸甚ならん

右御宸翰之通広く天下億兆蒼生を思食させ給ふ深き御仁恵の御趣意に付末々の者に至る迄敬承し奉り心得違無之國家の為に精々其分を盡すへき事

三月

總裁

補弼

その中に、「汝億兆」という言葉が出て参りますので、これは国民に出されたお言葉だと判ります。その中で「天下億兆一人も其所を得ざる時は皆朕が罪なれば今日之事朕自身骨を勞し心志を苦しめ艱難の先に立ち古列祖の尽させ給ひし蹤を履み」とあります。この明治維新の大業のもとで、新しい政治が行われます。日本国民が皆その所を得ない、国民が一人として自分の生き甲斐を感じない、そう言う事があれば、それは自分自身の（明治天皇）の罪だ、だから自分は其の為に心身を非常にいためている、そういうお言葉であります。

皇室の事は申しあげるのもなんですから、これ以上申し上げますことは差し控えたいと思います。臣下で言いますと西郷南州は弟に対して、自分は私欲で事を行った事は無い、と西郷従道に申しております。この西郷南州は「子孫の為に美田を買わず」子孫の為に財産を遺そうとは思わない。と言っておられます。

また、橘曙覧という方は非常に貧しい生活をしていた方ですが、その子孫に対する言葉は、「うそいふな。ものほしがるな。からだだわるな。」の三条でありました。この方の歌に

#### 贈正三位正成公を詠んだ歌に

一日生きば一日こころを大皇の御ために尽す吾家のかげ

天皇の御為に尽すそれが我が橘家の家風である。そのような気持ちの人が、もしもその立場、所を得ておればおそらくこの困難というものは克服されるはずであります。其の世界の歴史にない我々の歴史の現実を生かして、日本の真の精神を復活させるのか。このような混迷の時代を立て直し日本の指針として大きく発展させて行く事の元を立てたのが幽谷先生です。その幽谷先生の家の願いは、小野篁を遠祖として、其の精神を継ぎ、義公以来の水戸の精神の復興をする、という事でありました。何時の時か那珂町に居を構え、農村が非常に疲弊して来まして、祖父の代に城下に移り徒弟奉公を一生懸命にやりまして「のれん」を分けてもらわれて古着商を営むようになったようであります。

祖父の法名は光台寺の墓碑から「当閩流海信士」と云い、立原翠軒の撰文になる「安善居士藤田翁之墓」（光台寺）によれば「当閩処士」と見えるのみで、其の名は明らかではありません。

「水府系纂」に藤田家の系譜が揚げられていますが、幽谷先生の父である言徳は宗族故旧に対して心篤く接し、その費えも多かつたようであります。妻根本氏も「慈恵婉順」で言徳を助け、共に古着商に励み内助の功が厚かつたようであります。しかしながら見逃してならないのは、商人として精励するのは当然であります。が、一族のもの、ふる里の者が生活に困って相談に来ると救済介護の手を差し伸

べ、出費が多くても少しも意に介さなかつたことと共に、後の幽谷誕生の土壤ともなつた好学の風であります。

翁幼にして郷先生高倉翁に従いて宦学す。高倉翁其の器局を愛し、之をして仕へしめんと欲し、授くるに佩刀を以てす。然ども翁沈毅逡巡にして苟も仕ふるを欲せず。糜著を業と成し、以て二親を養ふ。（原漢文）

古着商をしているのは勿体無いから仕官するが良いと勧められますが承知しません。老いた父母を養うことに専念する言徳の姿が伺われます。因に父母の亡くなられた時の言徳の年令は、父の時が三十六歳（この年長男と時億生まれる）母の時は四十一歳（この年幽谷生まれる）であります。こうして自分は仕官しませんでした。言徳は自分の志を子に託そうとする気持ちがあつたようであります。

嘗て子定（幽谷先生のこと）に謂ひて曰く、吾既に仕へず、先師賜刀の意に背く。吾児の国に仕ふる者有らば、則ち亦以て少しく報ゆるに足るなりと。根本氏亦常に子定を激励し学を勧む。（安善居士碑文・原漢文）

その幽谷先生は親から、志を継ぐように多大の期待をかけられたと思われれます。その間の事情は、東湖の「先考次郎左衛門藤田君行状」に詳しい。

既に句読を小川某に受け、稍々文字識りて而も嗜まざるなり。ややもすれば氣を以て郷里兒童に雄たり。根本氏の病に臥すや、其の姉之を訪ぬ。談、子を教ふるの事に及ぶ。且つ謂ひて曰く、吾児万吉近く善く書を読む、亦喜ぶべきなりと。因りて頗る誇色有り。根本氏顧みて君を励まして曰く、汝句読を受く。而るに游嬉にして業を廃す。將に估畢の煩ひ、馳遂の戯に如かざるを以てせんや。汝何ぞ自ら万吉に愧ぢざらんやと。是に於て発奮し、始めて学に志し、復た群児と遊ばず。時に歳十歳。幾くも亡く根本氏の憂に丁ふ。悲哀成人の如し。而して励精刻苦、益々学に勤む。乃ち侃齋青木翁に師事し、謂ゆる四書五經なるもの、数月ならずして誦読し業を卒ふ。（原漢文）

お母さんが亡くなられた時、大人のように嘆き悲しんだ、人生の内には幾度か転機があります、歴史上にも、自分は是で良いのかと奮い立たれる方々があります。是から変わるわけです。この母の根本氏が亡くなられたのは天明三年四月二十三日、法名は「還相智好信女」（墓碑光台寺）時に幽谷十歳であります。母の訓誡が、ついには遺誠遺言となつたのであります。

当時の幽谷の有り様を「水府地理温故録」には

当天明六丙午に僅十三才、天性八九才より手跡を能し、近年書籍を好み、初同町医師鈴木玄栄につひて讀書し、十才斗より詩を賦し、書は社寺方の下吏勸介某に学ぶ。兩三年来此君堂主伯時先生（注、立原翠軒）に、書且書籍を学び、

詩文共能し、諸史経書に渡り、殊に又書を能くせり。館中の諸儒士も甚だ奇也とす。(中略)其名追日高く、書聴に達し、天明八戊申正月十三日切府(符)を賜りて御用部屋雜僧に被召出、剃髪の御沙汰はなく、俗体にて史館勤被仰付候。才能を以て町家より被召出しは此熊之助に始まる歟。此上の昇進いか程にや、はかりがたし

その非常な勉学ぶりは父言徳が体を気づかう程であつた。「幽谷遺談」にはその様子を次のように伝えています。

十才の頃より詩を賦す。書を読む事昼夜不廢。父与衛門思らく如斯精力を尽さば病を發せんと。夜四鼓(注、夜十時)過る時は臥すべしと云て燭を不与。ここに於て先生書を読む事能はざる故、夫より臥て詩を賦す事数首、毎度かくの如し。立原先生是を聞て父に諭して曰く、燭を与へざれば却て心思を勞せしむ、其兒の好む所に従ふべし。是より燭を乗て書を読む事通宵、極めて力を尽せり。

親子の情愛の濃やかなることこれか判るし、父の志を幽谷が継ぐ事にもなり、父言徳の思いも、感慨深いものがあつたに違いありません。しかしその父も、妻におくれること八年後の寛政三年十一月二十一日に亡くなられたのであります。時に幽谷十八歳、兄の「与右衛門時億」は二十三歳でありました。その悲嘆は深く、一家の支えは兄時億の肩にかかる事になります。

父を亡くした幽谷は悲哀号慟のあまり瘦せ衰えてしまい、展墓する姿を見た者は親を喪つた悲哀でその心迄喪つてしまったのかと感じたと云います。三年の心喪に服し酒肉をとらず、その風はその後の有志の士の範となつたと云われます。親子の情の深く、孝愛の篤いことが藤田家の家風となり「孝立てば則ち忠遂ぐ」という語があります。幽谷の家風と学風は、これにあてはまるでしょう。

次に注目すべきは、父の遺文の整理が行われます。「寛政四年日曆」(彰考館蔵)の正月六日の条に「整理遺書」とあり、父の手写した「軍書」「寛延三年万聞覚帳」(共に彰考館蔵)等を整理製本しています。幽谷の奥書きに「寛政壬子春正月六日、孤子一正泣血謹識」と書いてありますから、泣きながら心を込めて整理したのでありましょう。共に父言徳の十余才の時に自ら手書きしたものであります。其の中には兵書もあれば国字国語に関するものとか、また行政に関するものなどがあり、単なる古着商ではありませんでした。「軍書」の奥書きには、

書中言つ所、皆武備有る者、知らざる可からざるなり。而して況んや之が子為る者、其れ先訓を奉承する所以を思わざるべけんや。(原漢文)

商家の子息にして武備に関する書を読んでいた事に思いを致しています。又父言

徳の亡くなる前年「寛政庚戌冬十有一日男一正謹識」の署名の有る「民家分量記」  
（彰考館蔵）の奥書きに

右百姓分量記一冊、実に家大人十七才の時手書する所に係る。大人嘗て小子に語りて曰く、吾此の書を写し、將に以て児孫の警戒を為さんとす。今汝幸ひに師友の訓に頼りて、以て聖人の書を得。勉めよやと。小子曰く、唯退きて之を思はば、此の書国字俚語と雖も亦帛菽粟之旨、民生日用の訓と謂ふべきなり。大人年未だ弱冠に満たず既に厥の志後世子孫に胎す有り。豈以て一日として諸を忘れざらんや。況や吾兄弟親しく膝下の訓を受くる者をや。請ふ、吾兄と共に得て宝とせん。（原漢文）

これらの奥書きによれば、父言徳も経世済民の志をもち、子孫に伝えんとしていたことが知られます。東湖も父幽谷の服喪の時に専心幽谷の遺文の整理、書写に当っている。幽谷の亡くなったのは文政九年十二月一日（五十三歳）であります（時に東湖二十一歳）翌文政十年正月元日から遺文の書写整理を行い、同月二十一日は母及び伯姉と共に遺文の書写をしています。母根本氏が天明三年に没した後、継母山田益（文政三年九月六日没、年七十七、墓碑光台寺）が言徳の許に嫁しています。この山田氏について幽谷は「継母山田氏墓誌」を書いてあります。それによりますと、会津の藩士山田氏の娘で、早く父母を亡くして族人もいないので水戸に来ていたという。（その間の事情は明らかでない）

資性温順。吾兄弟及び妹を撫育し、慈愛一に所生（注、実母）の如し。伯兄既に長じ家事を督す。一正まさに学に志す。継母克く先考を助け、一正をして研精するに専力せしむ。稍々業成るに至る。何ぞ言ふに勝ふ可けんや。（中略）伯兄喪を主にし、一正をして壙中に記せしむる者、此の如し。藤田一正泣血謹識。（原漢文）

実母根本氏といい、継母山田氏といい、幽谷の成学に貢献する所、多大であった。そこにも温かい家風をしのぶことが出来る。まして継母の墓誌さえも誌すに至った恩愛の情の深さも知る事が出来ます。父言徳の学問への熱意と経世済民の学を継承し、非常の人物を育成したことは、その気風及び家訓であつたというも過言ではないと思われれます。

その幽谷先生の子が東湖先生であります。東湖先生の十代の時に、世の中はこのままではいけない、改革しなければいけない、という気持ちが強めています。この十代の時に同じ学問の兄弟であります豊田天功と共にどうしたかと言うと、読んだ書物が楊椒山集であります。豊田天功が編纂しまして、楊椒山と言う人は明の人であります、貧しい家から身を興した人であります、そうだと行って王室が滅ん

で良いと言う事は無い。明の王室の為に王室をダメにするような人物を自らの地位とか命を惜しまずに、直諫した。諫めました。これは死を意味します。その楊椒山という人が明の王室で権力を恣にしていた人物を除かなければならない。これが世の中を乱しているのだ。他の人達は、恐れて何も言わない、しかし楊椒山はその人物の悪弊を皇帝に直諫しました。それがばれて楊椒山は死刑になりました。此の人の文章を豊田天功が刊行します。東湖先生が十六、七の頃天功と共に読みまして切磋した書物であります。悲憤痛恨且つ泣き且つ読む、一座悄然として感動する。今を隔つること三十数年なり、とあります。結局自分の背負うべき仕事というものは国家の命脈を保つということでありました。

恐れ多い事でありますけれども、最初皇后陛下のお話をしましたので皇后陛下の著書で締めさせて頂きたいと思えます。すえもりブックスと言う小さい本がありますが、そこで「橋をかける」という本を出しています。「子供時代の読書の思い出」という皇后陛下のインドのニューデリーで国際児童図書協議会が昨年行われました。其の時に基調講演を皇后陛下がなさいました。しかしパキスタンで原爆実験等の事件もありましたので御出席なさらずにビデオでもって講演なさいました。日本のテレビでも放映されました。その中で、皇后陛下が次のように述べられています。

読書は私に、悲しみや喜びにつき、思い巡らせる機会を与えてくれました。本の中には、さまざまな悲しみが描かれており、私が、自分以外の人がどれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたのは、本を読むことによってでした。

自分とは比較にならぬ多くの苦しみ、悲しみを経ている子供達の存在を思い出すと、私は自分の恵まれ保護されていた子供時代に、なお悲しみはあったと言うことを控えるべきかも知れませんが、しかしどのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙には、それなりの重さがあります。

私が、自分の小さな悲しみの中で、本の中に喜びを見出せたことは恩恵でした。本の中で人生の悲しみを知ることが、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深めますが、本の中で、過去現在の作家の創作の源となつた喜びに触れることは、読む者に生きる喜びを与え、失意の時に生きようとする希望を取り戻させ、再び飛翔する翼をととのえさせます。悲しみの多いこの世を子供が生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われると共に、喜びを敏感に感じとる心、又、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思えます。

そして最後にもう一つ、本への感謝をこめてつけ加えます。読書は、人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。

人と人との関係においても。国と国との関係においても。

以上、皇后陛下の御講演をもって、本日のお話しを終わらせていただきたいと思います。

（平成十一年九月五日講座）

（県立水戸第一高等学校教諭）